報告11　フィンランド・エスポー

ケスクスプイスト職業学校

フィンランド・エスポーにある職業学校には、なんらかの支援を必要とする 1000 人の生徒が学んでいる。

フィンランドの障害児の義務教育後の教育環境は、スウェーデン（実質 25 歳まで可能）やデンマーク（STU 利用で義務教育＋ 3 年）の充実には及ばない。ここは、以前は国立の視覚障害者のための特別学校だった。現在は、知的障害、自閉症などいろんな障害児も学んでいるという。

生徒の 1000 人は 15 のコースで学んでいる。内、700 人が職業学校に 300 人はそれ以外の学びの場の位置づけだ。たとえば重度障害者の場合は、仕事と日常生活をおくるための教育となる。

全国の職業学校の 20 %は支援の必要な生徒だそうだ。職場実習なども行い 50 %強はさまざまなところに就職している。

放課後の活動を参観させてもらった。「放課後デイ」のとりくみを学校の枠でとりくんでいるようなイメージだ。

わたしたちが教室に入ると、「犬飼ってる人はいるの？」「どこに住んでるの？」と質問攻めにあった。

◆

イギリス在住のプレイディみかこさんが朝日新聞に寄稿していた（「欧州季評」2017 年 6 月 22 日）。

「欧州に古くて新しい政治の風が吹いている。教育費を増やし、勇気をもって未来に投資する政治が

人々の心を掴んでいるのだ。それを世界に知らせるように 6 月 8 日の英国総選挙は大番狂わせの事態になった。メイ首相は大勝を確信して解散総選挙に打って出たのに、コービン党首の労働党が怒濤の猛追し、与党の保守党の議席が過半数割れを起こした」

総選挙直前には、学校の前で PTA 役員たちが労働党のチラシを配っていたそうだ。地べたの人びとが、「学校を救え」の運動を全国に立ち上げていったという。

「自分で考えられる市民を育てるということは教育者が十分な時間を一人一人の子どものために割くということであり、それを可能にする投資を国が行うということを意味する」

「削減の政治は人々から希望を奪い、貧困と分断を押し広げた。今こそ恐れずに未来に投資しなければ、人も国も暗い時代に沈む。古くて新しい政治が支持を広げているのは、庶民こそ肌感覚でそれを知っているからだ」。　　（薗部英夫）